

# 国語

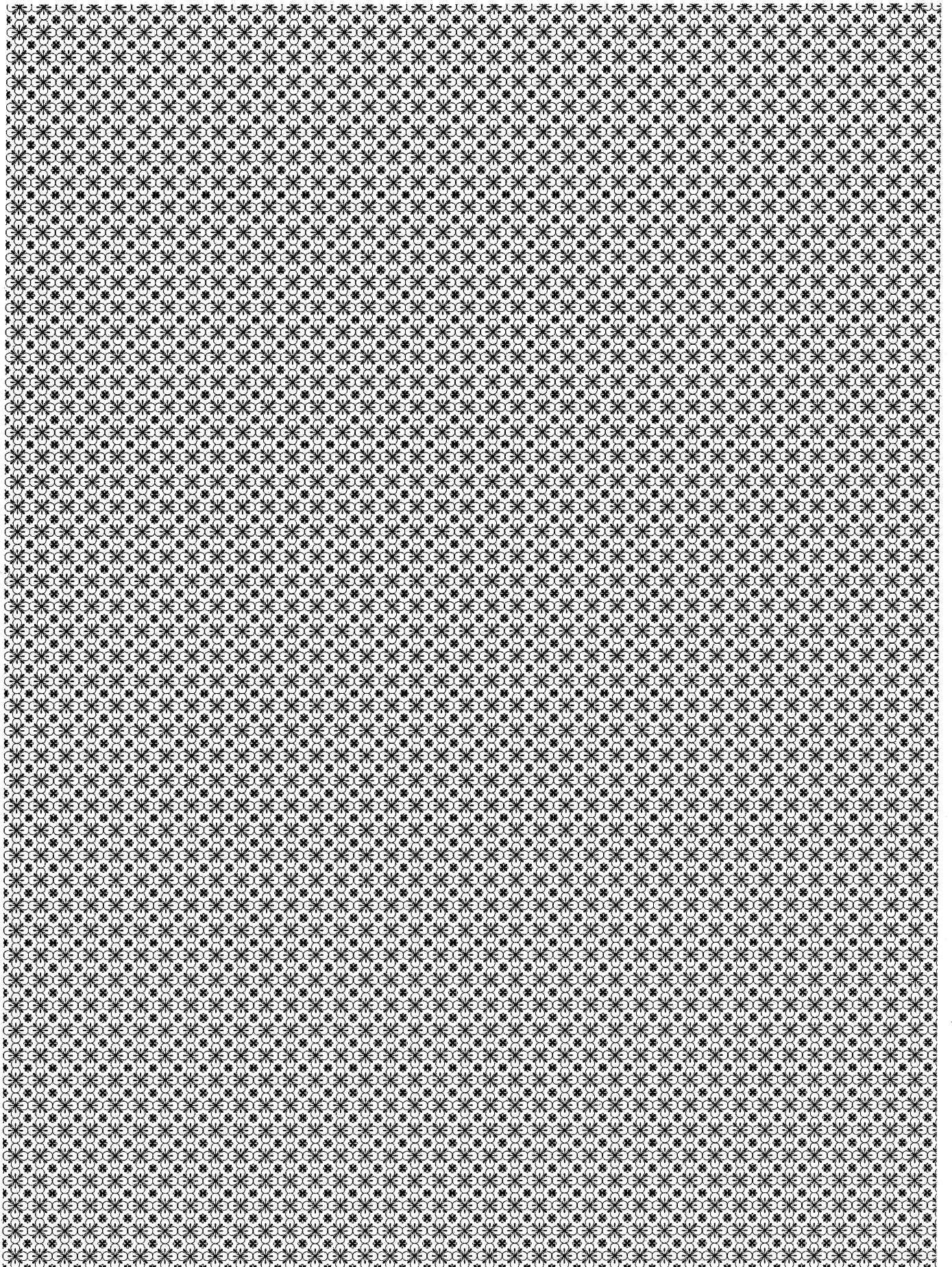


图-2-②-共

〔問 1〕 例文の傍線部の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 名状しがたい光景。

- 1 誰が見ても素敵な
- 2 知人から聞いていた
- 3 心の中で思い描いていた
- 4 はっきりと目に見えない
- 5 言葉で言い表すのが難しい

〔問 2〕 次の四字熟語の意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【晴耕雨読】

- 1 もめ事が起こった後かえって事態が安定すること。
- 2 自由な境遇を楽しみながら生活すること。
- 3 物事に一度失敗した者が、非常な勢いで盛り返すこと。
- 4 法令が次々と変わって一定しないこと。
- 5 自分の考えをもたず、他人の意見に従うこと。

〔問 3〕 例文の傍線部と同じ漢字を用いるものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】 遠慮エシヤクもないやり方である。

- 1 猫がエモノを待ち伏せする。
- 2 仏門にキエ|することになる。
- 3 エタイ|が知れない人物。
- 4 あのエガラ|が最も美しい。
- 5 修行で真理をエトク|する。

〔問 4〕 例文の傍線部の意味として最も適當なものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

【例文】「もつと練習しておけばよかつた」というオーソドックスな反省。

- 1 初歩的な
- 2 例外的な
- 3 正統的な
- 4 写実的な
- 5 消極的な

〔問 5〕 敬語の使い方として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 珈琲コヒキと紅茶、どちらを召し上がりますか。
- 2 伊藤先生に来ていただけると助かります。
- 3 鈴木様でいらつしゃいますか。
- 4 この電車は、ご乗車いただけません。
- 5 お荷物は、御自身でお持ちいたしますか。

〔問題〕 次の文章は宮沢賢治『よだかの星』の全文である。文章を読み、後の〔問 6〕～〔問 10〕に答えなさい。

\*1よだかは、実にみにくい鳥です。

顔は、ところどころ、味噌みそをつけたようにまだらで、くちばしは、ひらたくて、耳までさけています。

足は、まるでよぼよぼで、\*2一間とも歩けません。

ほかの鳥は、もう、よだかの顔を見ただけでも、いやになってしまおうというぐあい工合くあいでした。

たとえば、\*3ひばりも、あまり美しい鳥ではありませんが、よだかよりは、ずっと上だと思っていましたので、夕方など、よだかにあうと、さもさもないやそうに、しんねりと目をつぶりながら、首をそっ方むかへ向けるのでした。もっとちいさなおしゃべりの鳥などは、いつでもよだかのまっこうから悪口あくぐちをしました。

「へん。また出て来たね。まあ、あのさまをごらん。ほんとうに、鳥の仲間のつらよごしだよ。」

「ね、まあ、あのくちの大きいことさ。きつと、かえるの親類かみかなんかなんだよ。」

こんな調子です。おお、よだかでないただのたかならば、こんな生なまはんかのちいさい鳥は、もう名前を聞いただけでも、ぶるぶるふるえて、顔色を変えて、からだをちぢめて、木の葉のかげにでもかくれたでしょう。ところが夜だかは、ほんとうは鷹たかの兄弟でも親類かみでもありませんでした。かえって、よだかは、あの美しい\*4かわせみや、鳥の中の宝石たからのような\*5蜂はちすずめの兄さんでした。蜂はちすずめは花の蜜みつをたべ、かわせみはお魚ういを食べ、夜だかは羽虫はなむしをとってたべるのでした。それによだかには、するどい爪つめもするどいくちばしもありませんでしたから、どんなに弱い鳥でも、よだかをこわがるはずはなかつたのです。

それなら、たかという名のついたことは不思議なようですが、これは、一つはよだかのはねが無む暗あんに強つよくて、風を切きって翔かけるときのなどは、まるで鷹たかのように見えたことと、も一つはなきごえがするどくて、やはりどこか鷹たかに似にていたためです。もちろん、鷹たかは、これをひじょうに気にかけて、いやがっていました。それですから、よだかの顔さえ見ると、肩かたをいからせて、早く名前をあらためる、名前をあらためると、いうのでした。

ある夕方、とうとう、鷹たかがよだかのうちへやって参まゐりました。

「おい居いるか。まだお前は名前をかえないのか。ずいぶんお前も恥は知らずだな。お前とおれでは、よつほど人格じんかくがちがうんだよ。たとえばおれは、青いそらをどこまで飛とんで行く。おまえは、曇くもってうすぐらい日ひか、夜でなくちゃ、出て来こない。それから、おれのくちばしやつめを見ろ。そして、よくお前のとくらべて見るがいい。」

「鷹たかさん。それはあんまり無理です。私の名前は私が勝手につけたものではありません。神かみさまから下くださつたのです。」

「いいや。おれの名なら、神かみさまから貰もらったのだと云いつてもよからうが、お前のは、いわば、おれと夜と、両方りょうほうから借りてあるんだ。さあ返かえせ。」

「鷹たかさん。それは無理です。おれがいい名を教しえてやろう。市蔵いちぞうというんだ。市蔵いちぞうとな。いい名だろう。そこで、名前なまえを変えるには、改名かへなの披ひ露ろというものをしないといけない。いいか。それはな、首くびへ市蔵いちぞうと書いたふだをぶらさげて、私は以来市蔵いちぞうと申まをしますと、口上くちがしを云いって、みんなの所ところをおじぎしてまわるのだ。」

「そんなことはとても出来こりません。」

「いいや。出来る。そうしろ。もしあさつての朝あまでに、お前おまえがそうしなかつたら、もうすぐ、つかみ殺ころすぞ。つかみ殺ころしてしまうから、そ

う思え。おれはあさつての朝早く、鳥のうちを一軒ずつまわつて、お前が来たかどうかを聞いてあるく。一軒でも来なかつたという家があったら、もう貴様もその時がおしまいだぞ。」

「だつてそれはあんまり無理じゃありませんか。そんなことをする位なら、私はもう死んだ方がましです。今すぐ殺して下さい。」

「まあ、よく、あとで考えてごらん。市蔵なんてそんなにわるい名じゃないよ。」鷹は大きなはねを一杯にひろげて、自分の巢の方へ飛んで帰つて行きました。

★よだかは、じつと目をつぶつて考えました。

(いったい僕は、なぜこうみんなにいやがられるのだろう。僕の顔は、味噌をつけたようで、口は裂けてるからなあ。それだつて、僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない。赤ん坊のめじろが巢から落ちていたときは、助けて巢へ連れて行ってやった。そしたらめじろは、赤ん坊をまるでぬす人からでもとりかえすように僕からひきはなしたんだなあ。それからひどく僕を笑つたつけ。それにああ、今度は市蔵だなんて、首へふだをかけるなんて、つらいはなしだなあ。)

あたりは、もううすくらくなくなつていました。夜だかは巢から飛び出しました。雲が意地悪く光つて、低くたれていきます。夜だかはまるで雲とすれすれになつて、音なく空を飛びまわりました。

それからわかによだかは口を大きくひらいて、はねをまっすぐに張つて、まるで **A** のようにそらをよこぎりまわりました。小さな羽虫が幾匹も幾匹もその咽喉にはいました。

からだがつちにつくつかないうちに、よだかはひらりとまたそらへはねあがりました。もう雲は鼠色になり、向こうの山には山焼けの火がまっ赤です。

夜だかが思い切つて飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたように思われます。一疋の甲虫が、夜だかの咽喉にはいつて、ひどくもがきました。よだかはすぐそれを呑みこみましたが、その時なんだかせなかがぞつとしたように思いました。

雲はもうまっくろく、東の方だけ山やけの火が赤くうつつて、恐ろしいようです。よだかはむねがつかえたように思いながら、またそらへのぼりました。

また一疋の甲虫が、夜だかののどに、はいりました。そしてまるでよだかの咽喉をひつかいてばたばたしました。よだかはそれを無理にのみこんでしまいましたが、その時、急に胸がどきつとして、夜だかは大声をあげて泣き出しました。泣きながらぐるぐるぐるぐる空をめぐる空をめぐつたのです。

(ああ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死のう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向うに行つてしまおう。)

山焼けの火は、だんだん **B** のように流れてひろがり、雲も赤く燃えているようです。★

よだかはまっすぐに、弟の川せみの所へ飛んで行きました。きれいな川せみも、ちょうど起きて遠くの山火事を見ていたところでした。そしてよだかの降りて来たのを見て云いました。

「兄さん。今晚は。何か急のご用ですか。」

「いいや、僕は今度遠い所へ行くからね、その前ちよつとお前に遭いに来たよ。」

「兄さん。行つちやいけませんよ。蜂雀もあんな遠くにいるんですし、僕ひとりぼっちになつてしまふじゃありませんか。」

「それはね。どうも仕方ないのだ。もう今日は何も云わないでくれ。そしてお前もね、どうしてもとらなければならぬ時のほかはいたずらにお魚を取ったりしないようにしてくれ。ね、さよなら。」

「兄さん。どうしたんです。まあもうちよっとお待ちなさい。」

「いや、いつまで居てもおんなじだ。はちすずめへ、あとでよろしく云ってやってくれ。さよなら。もうあわないよ。さよなら。」

よだかは **C** ながら自分のお家へ帰って参りました。みじかい夏の夜はもうあけかかっています。

羊歯の葉は、よあけの霧を吸って、青くつめたくゆれました。よだかは高ききしきしと鳴きました。そして巢の中をきちんとかたづけ、きれいの中からはねや毛をそろえて、また巢から飛び出しました。

霧がはれて、お日さまがちょうど東からのほりました。夜だかはぐらぐらするほどまぶしいのをこらえて、矢のように、そっちへ飛んで行きました。

「お日さん、お日さん。どうぞ私をあなたの所へ連れてって下さい。灼けて死んでもかまいません。私のようなみにくいからだでも灼けるときには小さなひかりを出すでしょう。どうか私を連れてって下さい。」

行っても行っても、お日さまは近くなりませんでした。かえってだんだん小さく遠くなりながらお日さまが云いました。

「お前はよだかだな。なるほど、ずいぶんつらからう。今夜そらを飛んで、星にそうたのでござらん。お前はひるの鳥ではないのだからな。」

夜だかはおじぎを一つしたと思いましたが、急にぐらぐらしてとうとう野原の草の上に落ちてしまいました。そしてまるで夢を見ているようでした。からだはずうつと赤や黄の星のあいだをのぼって行ったり、どこまでも風に飛ばされたり、また鷹が来てからだをつかんだりしたようでした。

つめたいものがにわかに顔に落ちました。よだかは眼をひらきました。一本の若いすすきの葉から露がしたたつたのでした。もうすっかり夜になって、空は青ぐろく、一面の星がまたいたっていました。よだかはそらへ飛びあがりました。今夜も山やけの火はまっかです。よだかはその火のかすかな照りと、つめたいほしあかりの中をとびめぐりました。それからもう一ぺん飛びめぐりました。そして思い切つて西のそらのあの美しいオリオンの星の方に、まっすぐに飛びながら叫びました。

「お星さん。西の青じろいお星さん。どうか私をあなたのところへ連れてって下さい。灼けて死んでもかまいません。」

オリオンは勇ましい歌をつづけながらよだかなどはてんで相手にしませんでした。よだかは泣きそうになって、よろよろと落ちて、それからやつとふみとまつて、もう一ぺんとびめぐりました。それから、南の、大犬座の方へまっすぐに飛びながら叫びました。

「お星さん。南の青いお星さん。どうか私をあなたの所へつれてって下さい。やけて死んでもかまいません。」

大犬は青や紫や黄やうつくしくせわしくまたきながら云いました。

「馬鹿を云うな。おまえなんか一体どんなものだい。たかが鳥じゃないか。おまえのはねでここまで来るには、億年兆年億兆年だ。」そしてまた別の方を向きました。

よだかはがつかりして、よろよろ落ちて、それからまた二へん飛びめぐりました。それからまた思い切つて北の、大熊星の方へまっすぐに飛びながら叫びました。

「北の青いお星さま、あなたの所へどうか私を連れてって下さい。」

大熊星はしずかに云いました。

「余計なことを考えるものではない。少し頭をひやして来なさい。そう云うときは、氷山の浮いている海の中へ飛び込むか、近くに海がなかったら、」

たら、氷をうかべたコップの水の中へ飛び込むのが一等だ。」

よだかはがっかりして、よろよろ落ちて、それからまた、四へんそらをめぐりました。そしてもう一度、東から今のぼった天の川の向こう岸の＊11鷺の星に叫びました。

「東の白いお星さま、どうか私をあなたの所へ連れてって下さい。やけて死んでもかまいません。」

鷺は大風おおふうに云いました。

「いいや、とてもとても、話にも何にもならん。星になるには、それ相應の身分でなくちゃいかん。またよほど金もいるのだ。」

よだかはもうすつかり力を落してしまつて、はねを閉じて、地に落ちて行きました。そしてもう＊12一尺で地面にその弱い足がつくというとき、よだかはにわかにならぬようにそらへとびあがりました。そらのなかほどへ来て、よだかはまるで鷺が熊を襲襲うときするように、ぶるつとからだをゆすつて毛をさかだてました。

それからキシキシキシキシッと高く高く叫びました。その声はまるで鷹でした。野原や林にねむっていたほかのとりは、みんな目をさまして、ぶるぶるふるえながら、いぶかしそうにほしぞらを見あげました。

夜だかは、どこまでも、どこまでも、まっすぐに空へのぼって行きました。もう山焼けの火はたばこの吸殻すいがらのくらいにしか見えません。よだかはのぼつてのぼつて行きました。

寒さにいきはむねに白く凍こりました。空気がうすくなったために、はねをそれはそれはせわしくうごかさなければなりません。

それなのに、ほしの大きさは、さつきと少しも変わりません。つくいきは＊13ふいごのようです。寒さや霜しもがまるで剣のようによだかを刺さしました。よだかははねがすつかりしびれてしまいました。そしてなみだぐんだ目をあげてもう一ぺんそらを見ました。そうです。これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちていのか、のぼっているのか、さかさになつていのか、上を向いているのかも、わかりませんでした。ただこころもちはやすらかに、その血のついた大きなくちばしは、横にまがつてはいましたが、たしかに少しわらつておりました。

それからしばらくたってよだかははつきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま＊14燐りんの火のような青い美しい光になつて、しずかに燃えているのを見ました。

すぐとなりは、＊15カシオピア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになつていました。

そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。今でもまだ燃えています。

(宮沢賢治『よだかの星』より)



- ※1 よだか…ヨタカ科の鳥。夕刻から活動して、飛びながら虫を捕らえて食べる。正しい名は「よたか」。
- ※2 一間…「間」は長さの単位。建物と建物の間を指す。一間は約一・八メートル。
- ※3 ひばり…ヒバリ科の小鳥。体は褐色の地に黒い斑があり、春に空高くのぼってさえずる。
- ※4 かわせみ…カワセミ科の鳥。背と腹が空色で「空飛ぶ宝石」といわれる。水中の小魚などを餌とする。
- ※5 蜂すずめ…ハチドリ科の鳥。はちどりの別称。雄は多彩で光沢がある。
- ※6 めじろ…メジロ科の鳥。さえずりが美しく、愛玩用として珍重される。
- ※7 羊歯…シダ植物の総称だが、ウラジロを指すことが多い。葉は約一メートルになり、山中に自生する。
- ※8 オリオンの星…オリオン座のこと。首星はベテルギウス。俗に三つ星と呼ぶものを含む。二月上旬の夕暮れに南中する。
- ※9 大犬座…オリオン座の東隣にある星座。首星はシリウス。
- ※10 大熊星…大熊座のこと。ひしゃく形の北斗七星を含む。
- ※11 鷲の星…鷲座のこと。首星はアルタイル(牽牛星)。天の川の東岸にあつて琴座のベガ(織女星)と相對する。
- ※12 一尺…「尺」は長さの単位。一尺は約三〇センチメートル。
- ※13 ふいご…金属を精錬するときなどに使用する送風機。
- ※14 燐…元素の一つ。空气中で自然発火し、青白い光を発するものがある。
- ※15 カシオペア座…カシオペア座のこと。W形に並び、北極星を見いだす目印となる。

〔問 6〕6頁「★よだかは、じつと目をつぶって……」から「……雲も赤く燃えているようです。★」の場面における時間の経過は、本文のところどころで取り上げられる二つのものによつて示されている。その二つは何と何か。組み合わせとして最も適当なものを次の1〜5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 顔・咽喉のど

2 そら・はね

3 声・遠くの空

4 口・虫

5 雲・山焼けの火

〔問 7〕空欄A・B・Cに入る言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- |   |      |     |      |
|---|------|-----|------|
| 1 | A 弓  | B 衣 | C 怒り |
| 2 | A 矢  | B 水 | C 泣き |
| 3 | A 針  | B 風 | C 笑い |
| 4 | A 霧  | B 池 | C 歌い |
| 5 | A にじ | B 川 | C 叫び |

〔問 8〕傍線部I「急に胸がどきどきとして、夜だけは大声をあげて泣き出しました」とあるが、その理由の説明として最も適当なものを次の

1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 気が弱い自分が全ての生きものを敵にまわして独りぼっちで生きている運命が悲しくてたまらなくなつたから。
- 2 鷹から命を狙われているというストレスは、慣れているはずの甲虫を飲み込む動作にも苦痛を伴わせたから。
- 3 弱い者が強い者の犠牲になって命が存在しているという宿命のもとに自分自身もいることが分かつたから。
- 4 食物連鎖といった何かの命を食べることでは生きられない生物間のつながりの厳しさを思い知らされたから。
- 5 健気に小さな虫を食べ続けているだけの自分が鷹に殺されてしまう理不尽さと恐怖に堪えられなくなつたから。

〔問 9〕傍線部Ⅱ「僕は遠くの遠くの空の向こうに行ってしまうおう」とあるが、よだかはなぜ「遠くの遠くの空の向こう」に行こうとするのか。その理由の説明として最も適当なものを次の1〜5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 本気でいっさいの生きものを食べるのをやめて昇天した者は夜空のきれいな星になれるという、かつてお日さまが言っていた話を思い出したから。

2 たとえ飢え死を選んだとしても、また鷹に殺されるといった死に方を選んだとしても、結局は自分の誇りがずたずたに引き裂かれてしまうことになるから。

3 鷹に殺されようが飢えて死のうが、苦しい思いをして死ぬのに変わりはなく、そのような状況の自分を想像するだけで恐ろしくなってしまうから。

4 他者の犠牲のうえにしか存在できないという自分の宿命を認識させられ、絶対的不殺生の不可能というその絶望的真理から逃れようとしているから。

5 甲虫や羽虫を食べることや、鷹がよだかを食べてしまうといった自然界では避けられない宿命的な食物連鎖の中から一時的にでも逃れたかったから。

〔問 10〕傍線部Ⅲ「いつまで居てもおんなじだ」とあるが、なぜか。理由として最も適当なものを次の1〜5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

1 どこにいてもひとりぼっちなのは変わらないから。

2 これ以上、弟たちと話をする気分になれないから。

3 もう二度と、いじわるな鷹には会いたくないから。

4 ここにいても弟たちのように美しくなれないから。

5 よだかの決意は、まったくもって変わらないから。

〔問題〕次の文章を読み、後の〔問 11〕～〔問 15〕に答えなさい。

子供に取り返しのつかないことはない。<sup>\*1</sup>自分から取り返しのつかないことをしてはいけない、それが「原則」だ、と私は書きました。それでは、どうしても苦しく辛く、取り返しのつかないことをしそうなになった時、子供がそれをしないで踏みとどまるためには、どうすればいいでしょうか？

私はそれについて子供のころから考えてきたので、ひとつの答えを持っています。単純ですが、有効だとも経験によって知っています。「ある時間、待ってみる力」を持って、ということなんです。なんであれ、もう自分は取り返しがつかないことをするほかない、と思う時、とにかく「ある時間、待ってみる力」を持って、もうダメだ、とあきらめるな、といたいです。

子供にとって、この「ある時間」ということが本当に大切なのです。大人になってしまえば、「ある時間」待ってみても同じだ、ということはありません。しかし、子供にとっては、絶対にそうでない。待ってみる「ある時間」のなかに、すべてがある、と聞いていくくらいです。二十世紀に生きるあなた方につたえたい言葉をひとつだけ選べ、といわれたら、私はこういいます。

——もう取り返しがつかないことをしなければならぬ、と思いつめたら、その時、「ある時間、待ってみる力」をふるい起こすように！  
それには勇気がいるし、日ごろからその力をきたえておかなければならぬのでもあります。しかし、その力は、あなた方にあるのです。

さきにも書きましたが、私は<sup>\*2</sup>新制中学の一年の時、<sup>\*3</sup>旧制高校に通った人からやはり旧制の中学での<sup>\*4</sup>幾何の教科書をもらって、ひとりですそれをやっていました。高校でも幾何を続け、あわせて<sup>\*5</sup>解析を習いました。大学入試の問題集は、数学に関するかぎりむしろ楽しみに解いたものです。

こういう初歩的な数学は、そのすべてが、ということではありませんが、それこそギリシア以来の論理学から新しい学問としての記号論理学につながるころがあると思います。いまも、少し複雑なことを考える時——飛行機で外国に行くために、長い時間、坐っていなければならぬ場合など、とくに——ノートを小さく区分けして、その困いのなかに問題をひとつずつ整理して考えてみます。そうやって考えてゆくと、あらかじめこういう結論になればいいな、と思っていたのとは別の方向に行っても、それを受け入れる準備ができてるように感じます。もともと自分で考えたことですからね。

私が高校で習った解析は、まず「解析Ⅰ」というもので、微分や積分という、もっと高度の数学の考え方と方法が入って来ない段階でした。こちらの教科書や問題集にのっている計算が、私のように理科系のタイプでない生徒には、「解析Ⅱ」より面白かったことを思い出します。

私はとくに、文章に書かれた条件から数式を組み立てて、解いてゆく問題が好きでした。解く過程で、複雑な数と記号の式の、ある部分を一応括弧でくくって、それをたとえばAであらわします。それだけ、数式が簡単になりますし、計算を進めてゆくうち、等号の両側におなじ数のAがあることがわかったり、分子と分母にAがあつて、両方とも消えてしまったりすることがあります。そういう時は、じつに嬉しかったものです。また、Aが消えなくても、すっかり整理された式に、あらためて括弧を置いて、Aの内容を代入すると、計算がスラスラとできあがる、ということもありました。

一方、計算の最後の段階で、勢いこんで括弧をといてみると、最初のどうしても解けなかった問題が、そのまま再現して、Aという記号をつけての計算にいやした時間がすっかりムダだった、それこそ「骨折り損のクダビレもうけ」だったと、がっかりすることもありました。そういう時は、一息おいて、

——仕方がない！ おれのやったことだ、と氣をとりなおすようにしたものです。

じつはそのころから、数学よりほかの難しい問題についても、一部分をまず括弧でくくってAとする手続きで考えることを、始めていました。その場合にも、さきに書いたように、自然にAが消えてなくなつて問題が解ける、というものはありました。

また、やつと計算が——つまり問題を考えることが——整理されてきたので、Aを具体的な内容に戻すと、最初の難しい問題がそのまま残っている、ということがあつたのでした。そういう時、私は数学の場合とは少し別に、

——自分はこの問題のいちばん難しいところから、逃げていただけだ！ と氣がつきました。

そして、あらためて、正面からその難しいところに立ち向かつてゆく元氣を出したものです。それはもう、大人になつてからも続きました。

さて、私が数学をめぐる思い出を話したのは、次のことを説明したい、と思つたからです。

私は「ある時間、待つてみる力」をふるい起こすことが、子供には必要だ、といいました。それは、子供にはもちろん、大人にとつても、生きてゆくうえで、本当に難しい問題にぶつかった時、一応それを括弧に入れて、「ある時間」おいておく、ということなのです。そうやって、生きてゆくという大きい数式を計算し続けるのです。初めから逃げる、というのは違います。

そのうち、括弧のなかの問題が、自然に解けてしまうことがあります。括弧のなかの問題をBとすれば、「ある時間」待つている間も、とくに子供の時、私たちはそうしてもすっかりそれを忘れてはできません。そうしながら、いつも心にかかつていて、思い出されます。しかし、その苦しい時、具体的な問題や特定の人のことじゃなく、Bという記号に置きかえて、

——Bがまだ解決できていないけれど、もう少し待つてみよう、と考えることにするのです。

それだけでどんなに氣持が軽くなるか、私は幾度も経験してきました。いまもある記号に最悪の「いじめっ子」の顔が代入できるほどです。そして「ある時間」たつて、括弧をとりてみても、まだ問題がそのままであれば、今度こそ正面からそれに立ち向かつてゆかなければなりません。しかし、子供のあなたたちは、なんとかしのいだ「ある時間」のあいだに、自分が成長し、たくましくなつていくことに氣がつくはずで、そこが数学の場合と違います。私は、とくに高校のころから大学を卒業するあたりまで、そのようにしてやつて来ました。そして、現にいま、生きています。

私の家庭に初めての子供が生まれてきて、知的な障害を持つていると医師にいわれた時、そして将来も「なおる」ことはないと思つた時、それは私と<sup>\*</sup>家内にとつて、それまでの人生で解いてきた問題のなかの、いちばん難しいものに感じられました。

私の森のなかの村にいる母親も、それを自分の問題として受けとめて、解き方を探してくれたのでした。母は、都会では、知的な障害を持つた子供が差別されたり、いじめにあつたりするのじゃないか、と考えました。そして、自分の村でなら、住んでいる人たちはみんな昔から知っているし、子供たちがいじめるといふつもりでなくても、しつこくからかうことがあれば、自分で乗り出して話をつけてやることもできる、と解答を出したのでした。

そして、森のへりに孫の光とふたりで住む小屋のような家を建てて、そこに住みたいと思ふ、と提案をして来ました。家内にも話しましたが、結局、私たちは受け入れなかつたのです。

光が養護学校を卒業して、秋から福祉作業所に通うことがきまつていた夏のことでした。何度目かに祖母に会いに行った光が、私と家内には本当に思ひがけないことをいい出した、ということです。

——私は木工がとくいです。(そういつて、祖母に川の向こうの森を示してから)こんなに沢山の木がありますから、木工をして、お祖母ちやんと暮らそうと思います。

光は、自分で言葉にしてはいえなかつたのですが、福祉作業所で働き始めることに不安があつたのじゃないでしょうか？そして永い間に私たちから聞いていた森のへりの山小屋のプランを思い出していただいでしょう。

——ああ、そういうことができたらなあ！とだけ、母はいつたそうです。もう老年で、十数年前の提案を実現する体力も気力もなかつたのでした。

それからまた数年がたつて、<sup>※7</sup>光が少しずつ作曲していたものを、友人のピアニストがカセット・テープに録音してくれたものを森のなかの家に送りました。母は心から喜びました。家内に電話をして来て、森のへりの小屋で暮らそうとしなくてよかつた、ああしていたら、自分も光さんも、ナマケられるだけ愉快にナマケて、音楽を作るなど思ひもつかなかつたことだろう、といつたそうです。

「ある時間」の積み重ねが、私にも家内にも、母親にも、また光自身にすら、解き方の予想もつかなかつた、難しい問題をきれいに解いたのでした。これからも、光には新しい問題が生じてくるはずですが、かれの妹や弟もふくめた私の家庭は、追いつめられる気持なしでそれらに立ち向かえる、と思います。

(大江健三郎・大江ゆかり『自分の木の下で』より)

※1 自分から取り返しのつかないことをしてはいけない……この文章の少し前に「それでは、子供が取り返しのつかないことをすることはないかといえ、現実にあるのです。人間にとつて、それが自分の目で見るとより苦しく辛いことだ、と私は思います。子供が取り返しのつかないことをする、とはどういうことか？殺人と自殺です。ほかの人間を殺すまで暴力をふるい、自分を殺すまで暴力をふるうことです。」とある。

※2 新制……一九四七年(昭和二年)に発足した現行の学校制度を新制という。

※3 旧制……一九四七年(昭和二年)に発足した現行の学校制度以前のもを旧制という。

※4 幾何……図形やその占める空間の性質を研究する数学の一分野。

※5 解析……数学の一分野。後出の「解析I」は、数式や因数分解、関数や放物線などを含んだ分野。「解析II」は、関数や数列、微分や積分、統計や確率などを含んだ分野。

※6 家内……妻のこと。

※7 光が少しずつ作曲していた……光さんは幼少期から音楽に親しみ、現在、作曲家として活躍している。

〔問 11〕傍線部A・B・C・Dに近い意味の言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 A 窮地 B 周辺 C 隠れた D 快く
- 2 A 徒労 B 核心 C 耐えた D 見事に
- 3 A 不遇 B 側面 C 逃げた D 美しく
- 4 A 専心 B 要素 C まさった D 完全に
- 5 A 惰性 B 要点 C 待った D 予想外に

〔問 12〕傍線部I「立ち向かってゆく元気を出したものです」とあるが、元気を出せたのはなぜか。理由として最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 立ち向かうべき現実の問題を数式のように組み立てること自体が好きだったから。
- 2 問題をすっかり忘れているうちに、考えようとする気力や体力が回復してくるから。
- 3 しばらくして括弧をはずした時に、具体的な問題が自然と抽象化してくれるから。
- 4 難しかった問題も、時間をかけて解決しようとするれば易しいものになるから。
- 5 いくつかの問題が消えたり、立ち向かうべき問題がはっきりしたりするから。

〔問 13〕傍線部Ⅱ「解答を出したのです」とあるが、この解答を「私」はどのようなものと受け止めたか。最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 やむを得ぬ提案
- 2 現実的なプラン
- 3 感情的な意見
- 4 配慮のない言葉
- 5 早急すぎる結論

〔問 14〕傍線部Ⅲ「お祖母ちゃんと暮らそうと思います」とあるが、「私」はこの光の言葉をどのようなものと受け止めたか。最も適当なものを次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 両親よりも祖母になつていていことを実感させる台詞。せりふ
- 2 永い間熟慮を重ねた上で出した、堅実な結論。
- 3 機を逸してしまった、実行するには遅すぎた答え。
- 4 直面している現実から逃れるための思いつきの意見。
- 5 若さから生み出されたとはいえ具体性のある提案。



〔問 15〕 本文の趣旨に合う説明として適切ではないものを、次の1～5のうちから一つ選んで記号で答えよ。

- 1 時間をおいても自然に消えることのなかった問題こそ、もう一度しっかりと括弧でくくった方がよい難しい問題である。
- 2 問題を解決しようとして、あせって何かをするよりも、時間をおく方がいい場合も、世の中にはある。
- 3 問題に対し、すぐにでも何とかしたくなるのが人情だが、その気持ちをおさえてじっと待つためには、力をふるい起すことが必要である。
- 4 ある時間、待つということは、忘れてしまうことではないし、その問題から逃げ出してしまうことでもないのである。
- 5 作者の息子のエピソードを通じて、人生の難問にぶつかったときには「ある時間」待ってみることも大切であるということを伝えようとしている。

